

【論文】

韓国所蔵漢訳西学書に関する書誌的考察（下）

——『韓国所蔵中国漢籍総目』を手がかりに——

李 梁

- 一、はじめに
- 二、朝鮮王朝後期の思想状況—実学と西学思潮の勃興
- 三、漢訳西学書に関する基礎的書目文献（以上、前号）
- 四、『韓国所蔵中国漢籍総目』からみた漢訳西学書の書誌情報
- 五、朝鮮王朝後期における漢訳西学書の位置
- 六、むすび

四、『韓国所蔵中国漢籍総目』からみた漢訳西学書の書誌的情况

『総目』全6巻において、年代別を問わず、漢訳西学書の記録があるのは、第2巻の地理類、第3巻の農家類（二三）、天文算法類（五）および西学類（九）のみである。前述したように、版元などは違うものの、同一書物、また同一書物の重複分を加えても、種類も数量も驚くほど少ないと言わざるをえない。

以下、所収巻および部類別に、主な関係書目の書誌情報、所蔵地を示しておく。

（一）第2巻、史部・地理類

坤輿圖説

〔編者未詳〕

木版本／〔刊地未詳〕〔刊者未詳〕清版本／1冊（零本）

24.1 × 15.2cm

蔵本：券下（1冊）

〔奎章閣〕

坤輿全圖

南懷仁（清）立法

木版本／哲宗（1860）／2枚 162 × 150cm

刊記：咸豊庚申（1860）降婁海東重刊

〔高麗大・漢籍〕

(2) 第3卷、a. 子部上・三・農家類

農政全書

徐光啓(明)纂輯、張國維(明)鑒定

木版本／明朝年間／60卷14冊四周單邊半郭20.8×14cm

有界半葉9行20字 注雙行上黑魚尾24×16.2cm線裝／平露

堂藏板

印・李王家圖書之章

紙質・竹紙

[藏書閣]

農政全書

徐光啓(明)撰

寫本／5冊圖27.5×17.3cm

書名・表題

內容・農政全書抄

[高麗大・漢籍]

農政全書

徐光啓(明)纂輯

木版本／[刊地未詳]平露堂／9卷36冊圖25.5×16.8cm／

序・岳貢

印・集玉齋帝室圖書之章

[奎章閣]

農政全書

徐光啓(明)撰

木版本／道光22(1842)60卷24冊24.6×15.3cm

序・崇禎己卯(1639)……張國維書於蘇署之待

且堂、道光癸卯(1842)……潘曾沂撰

刊記：道光癸卯(1824)重刊曙海樓藏板

[高麗大・漢籍]

農政全書

徐光啓(明)纂輯、張國維(明)鑒定

木版本／清道光17(1837)序／60卷24冊四周單邊半

郭21×14cm有界半葉6行20字 注雙行上黑魚尾25×15.9cm

線裝

序・貴陽守恬侯馬君以是書寫可救黔之瘠也請付剞劂：道光十

七年歲次丁酉(1837)仲夏月貴州通省清軍糧儲兼巡道新恩任

樹森謹序

紙質・綿紙

內容・卷1～3農本、卷4～5田制、卷6～11農事、卷11～20

水利、卷21～24、農器25～30樹藝、卷31～34蠶桑、卷35～36

蠶桑廣類、卷37～40種植、卷41牧養卷42製造、卷43～60荒政

[成均館大]

農政全書

徐光啓(明)纂輯、張國維(明)鑒定

木版本／清道光23(1843)刊／60卷24冊左右雙邊半郭20×

13.5cm

有界半葉9行20字註雙行上黑魚尾24.5×15.9cm線裝

重刻序・全書版已漫漶殘缺王君壽康校覈重梓而序于余……時道

光癸卯(1843)五月之望吳門後學潘曾沂撰

印・藤井藏書

紙質・竹紙

[成均館大]

農政全書

徐光啓(明)纂集、張國維(明)鑒定

石印本／上海求學齋局清宣統1(1909)刊／60卷8冊四周雙邊半郭

17.3×11.3cm有界 半葉 2段 18行20字注雙行小黑口上黑魚尾20.5×13.2cm線裝

重刻序：時道光癸卯(1843)五月之望吳門後學潘曾沂譔

刊記：宣統元年(1909)上海求學齋局石印

紙質：竹紙

[成均館大]

農政全書

徐光啓(明)纂輯、張國維(明)鑒定

木版本／60卷16冊21×14.5cm四周匡郭21×14.5cm有界9行20字上黑魚尾

原序：道光十七年丁酉(1837)任樹森

內容：卷1～3農本、卷4～5田制、卷6～11農事、卷12～20水利、卷21～24農器、卷25～30樹藝、卷31～36蠶桑、卷37～40種植、卷41牧養、卷42制造、第43～60家政

[延世大]

(3) b. 五. 天文算法類

簡平儀說

熊三拔(泰西)撰說

寫本／不分卷1冊16.5×24.6cm

序：徐光啓(1611)徐光啓(明)創記

印：崑山鄭周慶印

[澗松文庫]

句股義

徐光啓(明)撰、李善蘭(清)校正

木版本／「刊地未詳」掃葉山房 清板本／1冊(33張)圖17.7×12cm

表紙書名：中西算學四種

印：集玉齋帝室圖書之章

合綴：測量異同

[奎章閣]

數理精蘊

木版本／「刊地未詳」1700] 8卷8冊圖27.4×17.6cm

表紙書名：八線表說 內容：1.卷一八線表上、2.卷二八線

表下、3.卷三對數闡微上、4.卷四對數闡微下、5.卷五對數

表上、6.卷六對數表下、7.卷七 八線對數表下、8.卷八

八線對數表下

[高麗大·華山]

崇禎曆書

徐光啓(明)受命編 木版本／「刊地未明」「刊者未明」崇禎4

年(1631)／32冊 函25.2×16.2cm 西洋新法曆書

印：帝室圖書館之章

[奎章閣]

新法曆書

徐光啓(明)受命編

木版本／「刊地未詳」「刊者未詳」82冊圖25.8×15.8cm

表紙書名：西洋曆法

印：帝室圖書之章

[奎章閣]

御製數理精蘊

〔編著者未詳〕

木版本／光緒8(1882)／45卷14冊27.0×17.2cm／江甯藩署藏版

刊記：光緒八年(1882)刊

印：朴匡齋書

〔国立中央圖書館〕

御製數理精蘊

〔編者未詳〕

活字本(鉛活字)／現存2卷2冊(零本、現存卷7～8)
17×20.7cm 四周雙邊半郭14×20.6cm 白口 白魚尾上
表紙書名：八線表

〔澗松文庫〕

御製數理精蘊

聖祖(清)御撰

木版本／清朝末期／民國初刊／對數表卷5～8圖四周雙邊半
郭21×13.5cm 有界半葉9行20字 註雙行 上白魚尾

28.3×17.5cm 綿裝

紙質：竹紙

〔成均館大〕

御製數理精蘊

聖祖(清)御撰

石印本／文海書局清光緒22(1896)刊／53卷24冊四周雙邊半
郭12.9×8.4cm 無界半葉2段18行40字 註雙行 上黑魚尾

15.3×9.8cm 綿裝

刊記：光緒丙申(1896)七月文海書局石印

紙質：綿紙

備考：袖珍本

〔成均館大〕

御製數理精蘊

聖祖(清)御撰

石印本／上海通時書局清光緒32(1906)刊／54卷24冊四周雙
邊半郭17.4×11.5cm 有界半葉2段18行40字 註雙行 20.2
×13cm 綿裝

刊記：光緒丙午(1906)上海通時書局石印

紙質：竹紙

〔成均館大〕

御製數理精蘊

聖祖(清)御撰

活字本／乾隆年間刊／53卷53冊(上編5卷下編40卷表8卷)
圖四周雙邊半郭20.3×13.9cm 有界半葉9行20字註雙行頭註
上白魚尾28.3×17.5cm 綿紙

紙質：竹紙

〔成均館大〕

御製數理精蘊

聖祖(清)撰

木版本／清朝年間刊／1卷1冊(零本)四周雙邊半郭21×
15cm 有界半葉12段行字数不定 註雙行上內向白魚尾28.5×
17.5cm 綿裝

紙質：竹紙

藏本：卷8

〔東國大〕

御製數理精蘊

木版本／上編5卷5冊下編40卷38冊合43冊四周雙邊匡郭20.5

×15cm 有界9行20字 上白魚尾
表題：數理精蘊

[延世大]

御製數理精蘊

聖祖(清)撰

木版本／「刊地未詳」[刊者未詳][刊年未詳]／2冊(零本)
表四周雙邊半葉匡郭20.3×14.2cm 有界9行20字版心上白魚尾28.2×17cm

版心書名：御製數理精蘊表

表紙書名：八線表

卷頭書名：八線對數表說

印：帝室圖書室之章 摘文院

藏本：御製數理精蘊表 卷7～8(2冊)

[奎章閣]

御製數理精蘊

聖祖(清)著

木版本／「刊地未詳」[刊者未詳]光緒8年(1882)／8卷40冊
表27×18.6cm

跋：光緒8年(1882)

印：集玉齋、帝室圖書之章

[奎章閣]

御製數理精蘊

聖祖(清)著

木版本／「刊地未詳」[刊者未詳]清版本／40卷42冊表25×16.2cm

印：摘文院、帝室圖書之章

[奎章閣]

御製數理精蘊

聖祖(清)著

木版本／「刊地未詳」[刊者未詳]清版本／8卷45冊圖26.7×17cm

數理精蘊

印：集玉齋、帝室圖書之章

[奎章閣]

御製數理精蘊

聖祖(清)著

木版本／「刊地未詳」[刊者未詳]康熙年間／38冊(零本)圖
26.7×17.2cm

印：圖学部圖書編輯局保管

藏本：下編

[奎章閣]

御製數理精蘊

聖祖(清)御撰

鉛活字本／6冊插圖15cm 9行20字上白魚尾 界線4周雙邊
11.4×8.1cm

藏本：卷6～8(全8卷8冊中零本)

[延世大]

御製數理精蘊表

木版本／8卷8冊四周雙邊匡郭21×15cm 有界9行20字上白魚尾

表題：數理精蘊

[延世大]

御製數理精蘊表

聖祖(清)著

木版本 / 「刊地未詳」[刊者未詳]清版本 / 8卷8冊 26.4 × 17.3cm

數理精蘊

印：帝室圖書之章

[奎章閣]

御製曆象考成

允祿(清)等 受命編

木版本 / 「刊地未詳」[刊者未詳]後刷 / 上編16卷後編10卷合 33冊 26.8 × 17cm

卷首：御製序：雍正元年(1723) … 世宗 雍正二年：允祿纂修

編校諸臣職名

印：集玉齋、帝室圖書之章

[奎章閣]

御製曆象考成

允祿(清)等 受命編

木版本 / 「刊地未詳」[刊者未詳]雍正2年(1724) / 上編16卷

下編16卷合21冊圖四周雙邊半葉匡郭 20.5 × 14.5cm 有界 9行

20字版心：上白魚尾 27.5 × 16cm

表紙書面：曆象考成

序：御製律曆原序：雍正元年(1722) 十月朔敬書、雍正二年

(1724) 五月十七日奉：允祿等諸臣職名

印：學部圖書、編輯局保管、□□寶等

藏本：表卷9 ~ 13(5冊)缺

[奎章閣]

御製曆象考成

何國宗(清)等 奉勅編

本版本 / 清 雍正2(1732)刊 / 上編16卷下編10卷 表16卷 (合20冊) 四周雙邊半郭 20.7 × 14.1cm 有界 半葉9行20字 註雙行上白魚尾 28 × 17.1cm 線裝

御製序：雍正元年(1732) 十月朔敬書

進呈：雍正二年(1724) 五月十七日奉旨開載纂修：臣何國宗

等彙編

印：雍正尊親之寶

紙質：竹紙

內容：〈上編〉卷1曆理總論、卷2弧三角形上、卷3弧三角形

下、卷4日躔曆理、卷5月離曆離、卷6交食曆理一、卷7交

食曆理二、卷8交食曆離三、卷9五星曆理一、卷10五星曆理

二、卷11五星曆理三、卷12五星曆理四、卷13五星曆理五、卷

14五星曆理六、卷15五星曆理七、卷16星曆理〈下編〉卷1日躔

曆法、卷2月離曆法、卷3月食曆法、卷4日食曆法、卷5土

星曆法、卷6木星曆法、卷7火星曆法、卷8金星曆法、卷9

水星曆法、卷10恒星曆法〈表〉卷1日躔表、卷2 ~ 4月離表、

卷5 ~ 8交食表、卷9土星表、卷10木星表、卷11火星表、卷

12金星表、卷13水星表、卷14恒星表、卷15黃赤經緯互推表下

[成均館大]

御製曆象考成

何國宗(清)等 奉勅編

寫本 / 光武3 / 不分卷2冊半葉12行20字註雙行 23.2 × 19.2cm

綿裝

墨書識記：道光庚子(1840) 天正冬至

寫記：己亥夏書

紙質：楮紙

[成均館大]

御製曆象考成

何國宗(清)等 奉勅編

寫本／光武元年(1897)寫／1卷1冊(卷10)四周單邊半郭
20.8×13.8cm 烏絲欄半葉12行註雙行24.5×17cm 綿裝

表題：御製曆象考成交食表

刊記：光武元年(1897)孟秋趙慶勳書

印：梅堂趙慶勳章

紙質：楮紙

[成均館大]

御製曆象考成

[編者未詳]

木版本／現存8卷8冊(零本) 17×20.7cm 白口 白魚尾上

備考：現存御製曆象考成後編 卷7～9、御製曆象考成表卷
9～13

[澗松文庫]

御製曆象考成

何國宗(清)等 奉勅編

木版本／湖北官書處光緒21(1895)／上編16卷下編10卷合15
冊 26.6×17cm

御製序：雍正元年(1723)十月朔敬書

標題：曆象考成

刊記：光緒二十一年(1895)冬湖北官書處敬刊

[高麗大·漢籍]

御製曆象考成

聖祖(清)撰、允祿(清)等 奉勅編

活字本(印書體)／英祖20～40(1744～1764)頃／零本2冊
圖 28.3×18.6cm 四周雙邊半匡郭 20.9×13.8cm 有界 9行20

字版心：白口上 下向黑魚尾

表紙書名：曆象考成

藏本：上編考一、二、下編一、二(2冊)以外缺

[高麗大·崑山]

御製曆象考成

允祿(清)等 受命撰

木版本／富強齋光緒24(1898)刊／16卷14冊四周雙邊半郭
12.2×8.8cm 線裝

別書名：律曆淵源

序：雍正元年(1723)十一月朔敬書

刊記：光緒戊戌(1898)春富強齋敬印

紙質：棉紙

[東國大]

御製曆象考成表

允祿(清)等 奉勅纂

木版本／零本1冊(卷9)／四周雙邊匡郭 21×15.8cm 有界
行字数不同上白魚尾

表題：土星表

內容：土星表

[延世大]

御製曆象考成後編

顧琮(清)等 奉勅纂

木版本／勵志書屋 光緒22(1896)刊／10卷16
24.4×15.4cm

奏議：雍正八年(1730)：監正臣明圖謹奏

刊記：光緒丙申(1896)秋勵志書屋錄

[高麗大·漢籍]

御製曆象考成後編

允祿(清)等 受命撰

本版本／「刊地未詳」 「刊者未詳」清版本／卷首10卷合8冊

圖 28.4 × 17.7cm

表紙書名：曆象考成後編

卷首：乾隆七年：總理允祿等諸臣職名

印：集玉齋、帝室圖書之章

[奎章閣]

御製曆象考成後編

允祿(清)等 受命撰

本版本／「刊地未詳」 「刊者未詳」乾隆七年(1742)序／6冊

零本 圖 27.3 × 17.6cm

表紙書名：曆象後編

卷首：乾隆七年：總理允祿等諸臣職名

印：觀甫 鈐文院 帝室圖書之章

藏本：卷1～6(6冊)

[奎章閣]

儀象志

南懷仁(清)著

本版本／「刊地未詳」 「刊者未詳」康熙13年(1674)序 14卷14冊 25 × 16cm

卷頭書名：靈台儀象志

序：大清康熙甲寅(1674)：南懷仁

印：帝室圖書之章

天問略

[奎章閣]

陽瑪諾(泰西)條答

寫本／朝鮮朝後期～末期寫／1冊(28張)四周雙邊半郭 25.7

× 17cm

鳥絲欄半葉12行25字 註雙行 頭註 31.9 × 19.5cm 線裝

紙質：楮紙

[成均館大]

渾蓋通憲圖說

李之藻(明)演、鄭懷魁(明)訂

木版本／2卷2冊四周雙邊匡郭 23 × 15cm 有界9行18字上黑

魚尾

[延世大]

(4) c. 九. 西學類

交食表

徐光啓(明)奉勅督修、湯若望撰、龍華民、羅雅谷共訂

木字活本／「出版事項未詳」／9卷9冊 30.4 × 19.2cm／四周

双边半匡 22.7 × 14.7cm 有界 10行22字版心：上下白口内向

花紋魚尾

版心表紙題：交食諸表法

標題題：西洋新法曆書

卷首：筭(算)交食諸表法

[高麗大·華山]

同文算指

利瑪竇(Matteo Ricci, 伊)編、李之藻(清)演

木版本／前編2卷1冊通編8卷4冊合5冊上下單編匡郭 12.5

× 10cm

無界9行21字上下黑口

序：萬曆甲寅(1614)徐光啓

[延世大]

萬物真原

鉛印本／若望(香港)高准宗25(1888)／1冊20.7×13.1cm
附錄·辟穢氏諸妄(徐光啓撰)、弁惑厄言(李問漁編)

[精神文化研究院]

萬物真原

木版本／華北書會印發／16張17cm 11行17字 上黑魚尾線四
周雙邊

120×96mm

備考：書函新報館代印、木版本3張

合綴：善彥勸戒華人 耶蘇降世一千八百八十三年

[延世大]

幾何原本

利瑪竇(Mathieu Ricci, 伊)·偉烈亞力(Alexander Wylie,
英)口譯

木版本／金陵[刊年未詳]同治4年(1865)／15卷8冊28.3×
18cm

跋：咸豐七年(1857)··韓慶陸

序：同治四年(1865)··曾國藩

印：帝室圖書之章

[奎章閣]

幾何原本

利瑪竇(伊)口譯、徐光啓(明)編 寫本／1900年代寫／1卷
1冊(零本)圖四周單邊半郭18.5×17cm鳥絲欄半葉16行28字

註雙行22×20.5cm

綿裝紙質：楮紙

藏本：卷1

[東國大]

幾何原本

利瑪竇(Mathieu Ricci, 伊)譯、徐光啓(明)述
石印本／13卷4冊14.5×10cm
刊記：光緒丙申(1896)

[延世大]

幾何原本

利瑪竇(伊)口譯、徐光啓筆受
寫本／3卷1冊28.2×17.3cm

刻序：吳淞徐光啓書

雜議：吳淞徐光啓記

譯引：萬曆丁未(1607)泰西利瑪竇謹書

題再校本：是書刻于丁未歲(1607)板留)

[高麗大·漢籍]

天主聖教十誠直詮

陽瑪諾 述湯亞立山

木版本／京都始胎大堂藏版1642／2卷1冊25.6×16.7cm

四周雙半匡18×13.2cm有界8行16字小字雙行上下白口黑魚
尾

[高麗大·薪庵]

渾天儀說

湯若望(獨逸)撰 羅雅谷 訂

木版本／明朝末期／32卷16冊圖左右雙邊半郭20.4×15cm

有界半葉9行22字注雙行25×17.7cm綿裝

序：崇禎九年(1636)日躔壽星之次督脩曆法山東布政李天

經書于脩曆公署

印：李王家圖書之章

紙質：竹紙

內容：冊1、2渾天儀說 冊3、6交食曆指 冊7升度量用

法

黄赤距度表 正球度表 黄道交極圖角表説 冊8 學曆小辯
冊9-11
交食表 冊12-16 交食諸表

[蔵書閣]

測天約説

鄧玉函 (Jean terrenz, 伊) 撰

木版本 / 「刊地未詳」 「刊者未詳」 清版本 / 2冊 26.2 × 10cm /
西洋新
法曆書
印: 摛文院、帝室圖書之章

[奎章閣]

泰西水法

態三拔 (泰西) 譯説

木版本 / 「刊地未詳」 「刊者未詳」 清版本 / 5卷1冊 (79張) 25
× 16cm / 序: 萬曆四十年 (1612) … 徐光啓、萬曆壬子
(1612) … 彭惟成
印: 帝室圖書之章

[奎章閣]

泰西水法

態三拔 (泰西) 譯徐光啓 (明) 筆記、李之藻訂正

寫本 / 辛丑寫 / 6卷1冊 圖 半葉 16行35字註雙行 26.7 ×
18.6cm / 棉裝 序: 萬曆壬子歲 (1612) 夏五月望日賜同進士
出身史料都給事中河東曹于? 撰 卷末墨書識記: 辛丑七月十
二日

紙質: 楮紙

内容: 卷1用江河之、卷2用井泉之水、卷3用雪雨之水、第4
水法附? 卷5水法或問卷、卷6龍尾一圖

[成均館大]

恒星表

湯若望 (獨) 著

寫本 / 「刊者未詳」 / 12張 23.2 × 16cm

[国立中央図書館]

以上で示したように、漢訳西学書関係の書物は、第一の史部・地
理類には同一著者による著書の2部である。そして第二の子部・
農家類には、同一書物の8部だけである。第三の天文算法類に
は、一番多いようにみえるが、同一書物の重複分があつて、それ
でも30部を超えてない。しかも宣教師の手による漢訳西学書は、
ウルシス (Sabatini de Ursis, 1575-1620、熊三拔) の『簡平儀
説』、フェルビーストの『儀象志』、ディアス (Emmanuel Diaz,
1574-1659、陽瑪諾) の『天問略』という三部のみである。さら
に、第四の西学類 (九) には、本稿と関係のある書物で重複分を加
えても十数部しか数えない。つまり、マテオ・リッチの『幾何原
本』、『圓容較義』、ウルシスの『泰西水法』、アダン・シャルの
『恒星表』、『渾天儀説』、テレンツ (Joannes Terrenz, 1576-
1630、鄧玉函) の『測天約説』などである。注目すべきなのは、天
主教神学思想を敷衍する二部の重要な教理書、つまりアレーニ
(Julius Aleni, 1582-1649、艾儒略) らの『萬物眞原』、ディアス
の『天主聖教十戒直詮』が収蔵されていることである。これ以外
は、殆ど十九世紀末ないし二十世紀初期において、主としてプロ
テスタント系の宣教師による著訳書である。本稿のカバー範囲を
逸脱しているため、ここで省いておくこととする。

以下、掲載の部類順に従って、書誌情報や収蔵状況について少
々敷衍しておく。

まず第一の史部・地理類についてである。地理類には、奎章閣所蔵の『坤輿図説』と高麗大所蔵のフェルビースト(南懷仁)『坤輿全図』のみである。『坤輿図説』は編者不明としているが、それは、明らかに『坤輿全図』とともに、康熙十三年(1674年)に、フェルビーストの手によって編纂された地理解説書である。『坤輿図説』は上、下二巻からなっているが、上、下巻とも、それぞれマテオ・リッチの『乾坤体義』¹⁾、アレーニの中国初の漢文世界地理書『職方外紀』を多く踏まえていたのである。韓国での調査の際、高麗大図書館側が準備できていないため、後述する同大所蔵の『幾何原本』初版本の写本とともに、当該地図を実見することができなかったが、後日、代わりに高麗大の李漢燮教授に行って頂いた実物見分によると、同大所蔵の『幾何原本』も『坤輿全図』も、いずれもいわゆるレプリカである。それから、刊行地、刊行者不明とする『坤輿図説』とともに、みな清代の写本、または刊本である、という(図一、図二参照)。



図 1.



図 2-1.



図 2-2.

図1は、図2はともに高麗大蔵版の『坤輿全図』、『幾何原本』(写真 高麗大李漢燮教授)

それから、第二、第3巻、a. 子部上・三・農家類には、蔵版所蔵地こそ違うものの、徐光啓著『農政全書』の一点のみである。そもそも『農政全書』は、徐死後、孫の徐爾爵から祖父の残した手稿を編纂して刊行された中国農書の集大成の名著であるが、その中に『泰西水法』が所収されたとはいえず、全体的には、真正正銘の漢訳西学書とは言えないであろう。しかし、『四庫全書総目提要』(以下『四庫提要』)に、「『明史』光啓本伝を考えるに、光啓 西洋人利瑪竇に従い、天文曆算火器を習い、その術を尽くしたり。崇禎元年、また西洋人龍華民(Nicolaus Longobardi, 1559~1654, ロングバルディー)括弧内筆者、下同)、鄧玉函、羅雅谷(Jacques Rho, 1593-1638, ロー)などと同じく新法曆書を修め、故にその一切の捷巧たぎの術を得たり、これを書に筆しす能うなり。」とあるように、やはりリッチ、ウルシスらから受けた西学の影響を抜きに考えられないため、ここに列挙しておいた訳である。

さらに、第三の天文算法類である。漢訳西学書としては、主としてウルシスの『簡平儀説』、フェルビーストの『儀象志』、ディアスの『天問略』、徐光啓の『崇禎曆書』、『新法曆書』などが挙げられる。『数理精蘊』、『曆象考成』および『曆象考成後編』とも清康熙雍正期に成立した書物で、厳密に言えば、本稿の射程範囲を逸出しているが、多くの内容は明末期発生の「西学」と密接な関連があるということ、やはりここに列挙しておいたのである。なお、徐光啓の『句股義』、李之藻の『渾蓋通憲図説』⁴⁾は、彼らによる敷衍が多く純粹の漢訳西学書ではないが、やはり西学の強い影響下の産物という理由でここに掲示したのである。

では、当該部類の幾つかの書物について、大まかな内容とその

特徴をみてみよう。

まずウルシスの『簡平儀説』は、萬曆三十九年(1611)、簡平儀の原理およびその使用方法を説明する天文学書として刊行されたが、弧線、平(渾)円の概念、赤道経緯線、黄道経緯線の計算など数学問題も多く含まれているため、『四庫提要』から、その「法簡而用捷、亦可云数学之利器也。」と高く評価されている。そして、『儀象志』は、また『靈台儀象志』とも言い、フェルビーストが自ら設計し製造に携わった簡平儀、限象儀、紀限儀など天文観察儀器の原理、構造および使用方法を説明するために書かれた解説書である。ここで、楕円の作法および楕円規の構造をはじめで紹介されたことは注目すべき点であろう。ディアスの『天問略』は萬曆三十九年(1611)刊、諸天文現象の解説を通して天主教信仰の真理性を論証しようとしているため、『四庫提要』では、「蓋欲借推測之有驗、以証天堂之不誣、用意極為詭譎。然其考驗天象、則實較古法為善。」という実用主義的な評価を下している。

なお、天文算法類の収蔵書において、収蔵数が際立って多いのは、『數理精蘊』、『曆象考成』および『曆象考成後編』である。『數理精蘊』は、『御製數理精蘊表』を入れると、のべ16部、『曆象考成』は9部、『曆象考成表』1部、『曆象考成後編』は3部、という具合である。本稿の射程範囲外であるし、重厚な先行研究⁷⁾もあるゆえ、ここに詳細な書誌情報を省いておくが、二点だけ付け加えておきたい。まず第一点は、『數理精蘊』所収の七巻本漢文版『幾何原本』(附『算法原本』)は、リッチと徐光啓の訳本と違い、前述したジョルビヨンやブーヴェらがフランス人数学家パルディーの幾何学教科書『實用幾何学』(P.Pardies, *Geometrie*

pratique et theorique; 1671)を底本にしたものである⁸⁾、ということである。それから、もう一点、つまりこれらの書名の上に、どれも「御製」という「お墨付き」があることからみて、明らかに官学の地位または権威性を強調している、ということである。ところが、いわば国家行政上の制度的なものでなく、単なる皇帝(康熙また乾隆帝)個人の趣味による保護、權威化(官学化)は、かえって暦学、就中数学の独自の発展にマイナスの要因が多かったという指摘もある、ということである。

それから、「天文算法類」にもう一点言及せねばならないのは、『崇禎曆書』と『新法曆書』である。二書は異名だが、同一の曆書である。それは、順治元年(1645)、アダム・シャールは明大学士徐光啓が訳した崇禎曆書を新法曆書と名を改めて新たな支配者となった清朝に献上したことによるものである。

そもそも元朝以降、使い続けた大統曆が明末になると、実際の天象とのずれが増す一方である。日、月の食現象の観察予測に使われた回回曆(イスラム曆)もまた同様だったのである。崇禎二年(1629)五月一日の日食はそれによる推算はまたもや失敗したので、朝廷上下にとって、改曆の議が俄に高まってきた。そうした中で、同年七月、礼部は、宣武門内の「首善書院」で、徐光啓を首班とする曆局を設けて、李之藻のほか、ロングバルド、テレンツ、アダム・シャールおよびローなどの協力をえて漸く改曆に乗り出した。こうして五回にわたって朝廷に進呈されたのは、のべ百三十七巻に上る『崇禎曆書』である。『崇禎曆書』は、基本的にデンマークの天文学者チコ・ブラーエ(Tycho Brahe, 1546-1601)の地球中心説の体系に依拠し、その「数学は大部分が幾何学と三

角法に属し、とりわけ平面三角法と球面三角法に属するものが多い¹⁰⁾』という。『崇禎曆書』は、当時事大主義を取っていた李朝社会には勿論、日本を含めた東アジア諸国にも多大な影響を与えたのである。

そして、最後に、西学類についてである。西学類においては、書誌的な意味からも重要性からみても、まず取上げるべきなのは、ほかならぬ『幾何原本』であろう。

周知の如く、『幾何原本』は、明末の万曆三十五年、つまり、西曆の1607年、マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1652-1610¹¹⁾ 利瑪竇)と当時、明の翰林院庶吉士徐光啓 (1562-1633)との共訳によって、北京で公刊された初の本格的な漢訳西学書である。

『幾何原本』は、ユークリッド (Euclid) の幾何学名著『原論』 (ΣΤΟΙΧΕΙΑ = *Elementa*) の漢訳にはかならない。ただし、『幾何原本』の底本は、直接ユークリッドのギリシア語原典ではなく、リッチの数学の師、「十六世紀のユークリッド」と言われたクラヴィウスが解説、編纂した十五巻本のラテン語版 (*Euclidis Elementorum libri XV*, 初版1574年)の前六巻によつてである。ともかく、史上初の本格的な漢訳西学書として、『幾何原本』は後世の中国のみならず、漢字文化圏の東アジア諸国にも大きな影響を及ぼし、その意義がきわめて大きい¹²⁾。

『総目』に示される『幾何原本』現存版本は、上表の書誌情報からわかるように、のべ四点ある。その中で、「奎章閣」蔵版は、同治四年 (1865)、太平天国の乱の鎮圧によつて中央政界で頭角を現わした清末洋務派首領の一人、曾國藩 (1811-1972) が江南製造局から刊行された江南版である。ただその版元は、英国宣教師

のワイリー (Alexander Wylie, 1815-1887, 偉烈亞力)と清末の数学者李善蘭 (1811-1882) が共訳し、1850年に、メドーハスト (Walter Henry Medhurst, 1796-1857, 麦都斯) が経営する墨海書館から刊行された『幾何原本』後九巻の訳本である。ちなみに、この後九巻の翻訳完成によつて、マテオ・リッチと徐光啓の訳本に次いで、はじめて中国で『原論』の完訳版をみる事ができたのである。ただ『幾何原本』後九巻の翻訳底本は、マテオ・リッチと徐光啓の前六巻、およびフランス人宣教師による七巻本の訳本とも違つて、1570年に刊行されたHenry Billingsley (?-1606) の英訳本 *The elements of geometry of the most ancient philosopher Euclide of Megara* だったのである¹³⁾。それから、*philosopher Euclide of Megara* による満州語訳本 (底本は前述した七巻本と同じ)を加えると、底本、言語とも違う複数の版本が見え、『幾何原本』の興味深い受容史の一端を表しているように思われる¹³⁾。

なお、「東国大」、「延世大」の蔵版は、いずれも十九世紀末の刊本であつて、実物を検分しないとわからないが、恐らく後九巻の刊本だろうと思われる。そして、最後の「高麗大・漢籍図書館」の蔵版に、最も興味を引き立てられる。写本ではあるが、年紀からみて、明らかに『幾何原本』の1607年の初版本に基づいたものだったことがわかる (図2参照)。

そもそも李朝時代をとおして、朝鮮の士人達 (両班) が殆ど性理学に一辺倒ということ、数学は専ら下級技官みtain「中人」階層が担う科目だったのである。李朝時代を通して、朝鮮学者は、『詳明教訣』、『教原』、『影数』などの数学書を著したが、一般には『算学啓蒙』、『楊輝算法』、『教書九章』など中国伝来の数学

書の研究消化にエネルギーを費やされ、特段の数学上の創見がそれほどなかったと言えよう。その中でごく少数ではあるが、数学、とりわけ従来の数学伝統に欠けた演繹論的幾何学に魅了され、それに没頭したものもいたのは、また事実である。すなわち、前述した洪大容、李家渙を代表とする知識人である。ただ、洪大容は、官吏につかない学者こそ「天から授けた官職」として、その天文数学への情熱と研究成果は、少なくとも当時においては、一介の在野知識人の個人的趣味の域を出なかったとみてよからう。

一方、李家渙は、時の国王の正祖から厚い信頼を受け、「工曹判書」(閣僚級)の要職に登り詰めた人物である。彼は『幾何原本』を精読し、「東国」朝鮮の幾何学権威を自認していたにも関わらず、残念ながら辛酉教獄(1801年)の際、連座し刑死したため、実際にその幾何学理解はいかばかりのものだったのかは知ることができないのである¹⁵⁾。

西学部類に、ほかにまた、アダム・シャルルの『渾天儀説』、『交食表』、『恒星表』、テレンツの『測天約説』、ウルシスの『泰西水法』およびリッチと李之藻との共訳数学書『同文算指』などがある。以下、これらの著書について簡略にふれておくこととする。

書目からみれば、『渾天儀説』、『交食表』、『恒星表』および『測天約説』は、どれも天文学関係の著書で、実際にはみな『崇禎曆書』の中に収録され、あるいはもともとその一部分を構成するものであった。なぜかここでは、「天文曆算類」ではなくて、西学類に分類されている。恐らくはもともとと目録に、そういうふうに分類されて、『総目』でもそれを踏襲されたであろう。それはともかくとして、そのほかに、西学類において、とくに触れておく

べきなのは、『泰西水法』と『同文算指』である。



図3.



図4.

(図3、図4は、韓国ソウル大学校奎章閣所蔵徐光啓、湯若望ら編訳した『崇禎曆書』、『恒星表』の内首頁である。頁上部にそれぞれ「朝鮮総督府圖書之印」、「京城帝国大学図書章」、「ソウル大学校図書」という押印があることから、当書所蔵の歴史の変遷ぶりを見て取れて興味深い。写真筆者)

『泰西水法』は、ウルシスが口述し、徐光啓が筆録し、明万曆四十年(1612)刊行、全六巻、「みな取水蓄水の法を記す¹⁶⁾、いわば農業灌漑に関する技術書である。そのためか、徐光啓の『農政全書』の水利部分は、殆どこの書を以て充てている訳である。それから、『同文算指』も、リッチが口訳し、李之藻が筆録し敷衍し、万曆四十二(1614)年に刊行されたはじめての漢訳西洋算術書である。内容はおもに、クラヴィウスの『実用算術概論』(Epitome arithmeticae practicae, 1585)、程大位の『算法統宗』(1592)に基づいて編訳され、大きく「前編」、「通編」および「別編」に分かれている。「前編」は、おもに整数と分数の四則演算を論じ、「通編」は比例、比例配分、盈不足問題、級数、多元一次連立方程式、開方、などからなる。「別編」は、ただ截圓弦算の一節からなっているだけである¹⁷⁾。

五、朝鮮王朝後期における漢訳西学書の位置

十九世紀に入っても、辛酉教獄(1810年)、「己亥教獄(1839年)」のように、キリスト教迫害を止めるどころか、実用の科学技術書まで焼き捨てられてしまったという事実からみて、朝鮮王朝の西教弾圧と信者迫害の峻厳さは、同時代の日本と中国に及ばざるも過ぎたるものがあると言えよう。このことは、韓国(朝鮮)に現存する漢訳西学書の少なさの重要な一因となっているには違いない。勿論、問題はこれほど単純明快ではない。むしろ、それは、朝鮮西学の特質―西学との間接的な受容―と無関係ではなかったし、また朝鮮社会のありよう、とくに主流を占める伝統的思想(性理学、小中華意識)との軋轢や朋党政治の弊害とも密接に関係しているともみてよからう。だが、朝鮮またベトナムの漢文史料の重要性が益々注目されている昨今において¹⁸、李朝後期社会における漢訳西学書の思想的影響は、やはり看過できない歴史的痕跡が多く存在しているはずであろう。たとえば、漢訳西学書將來期(十七世紀―十八世紀)に活躍していた星湖学派、北学派などは言うまでもなく、やや遅れて登場してきた十九世紀の大儒、科学者でもある丁茶山(若鏞、1762-1836)は、西学を通じて学んだ知識を活かして、今日世界遺産となった水原(京畿道)の「華城」の設計、建設に携わる一方、西学、とりわけスコラ哲学、とくにキリスト神学を通して接触したアリストテレスの思想から刺激を受けて、朝鮮性理学(朱子学)の基本的哲学パラダイムを否定し、その根本的な転換をはかろうとしたのは好例の一つである。具体的

な論述は、本稿の趣旨を逸脱してしまうため、ここで指摘に止めおきたい¹⁹。

六、むすび

韓国所蔵の漢訳西学書に関する書誌学的考察は、書物の流布、閲読および影響といった問題群を明らかにするための基礎的作業である。だが、その目標達成のためには、書誌的考察は重要であるが、それだけでは限界があるというのは言うまでもない。最も网羅的な『総目』も実はまだまだ書目の漏れや未収載が多くあると言われている。それから様様な史料、たとえば各種の年代記(とくに朝鮮王朝実録)、膨大な量に及ぶ士人の文集類にたいする緻密な読み込みや分析は避けて通れない²⁰。これも、さらなる研鑽を以て、別稿で展開していきたい。

¹ 『乾坤義考』については、今井湊「乾坤義考」(数内清ほか編『明清時代の科学技術史』(京都大学人文科学研究所刊、1970年所収)はコンパクトで詳しい。

² 南懷仁の『坤輿図説』は、上下二巻、『坤輿全図』の解説のために書かれたのである。上巻には、坤輿図説、地体之圖、地球南北兩極、地震、山岳、海水之動、海之潮汐、江河、天下名河、氣行、風、雲雨、四元行之序並其形、人物；下巻には、亞細亞洲及各国各分島分論、歐邏巴洲及各国各分島各論、利未亞洲及各国各島分論、亞墨利加洲及各国各島分論、四海總説、海峽、海族、海産、海船とある。方豪『中西交通史』(下)、(上海人民出版社、2008年) 355頁および前掲徐宗澤編『明清間耶穌会上訳者提要』、318-220頁、林東陽「南懷仁对中国地理学和製図学的貢獻」(魏若望編『伝教士・科学家・工程師・外交家南懷仁(1623-1688)』、社会科学文献出版

社 2001年 J.W.Witek ed. 'Verdinand Verbiest (1623-1688). *Jesuit Missionary, Scientist, Engineer and Diplomat*. Monumenta Serica Monograph Series, XXX, Nettetal, 1994) 参照。

³ 『四庫提要』(中華書局 1965年版)下、子部、農家類、853頁。

⁴ 『渾蓋通憲図説』の『四庫全書』版にも、『天学初函』版にも李之藻演または撰だけ記されているのみで、いずれもリッチの署名がなかった。しかし内容は、基本的にマテオ・リッチの数学の師、クラヴィウス(Christopher Clavius, 1537-1612)、「先生」の「アストロラーベ」(*Astrabadum*, 1693年刊)を踏まえたので、やはりリッチが口述し、李之藻が筆録し敷衍したものだと考えられている。方豪「李之藻研究」、台湾商務印書館、中華民國七十八年9年版、49頁、趙建海「李之藻の科学思想と中西の数理天文学」(東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻2004年度博士論文)参照。

⁵ 『四庫提要』下、子部・天文算法類、895頁。

⁶ 同上。なお、『天問略』の底本には、複数のソースがあると見られている。その中で、中国ではじめてガリレイ(Galileo Galilei, 1564-1642)の望遠鏡による天象観察を紹介したことはとくに注目すべき点であろう。『天問略』は、目下ポルトガル人学者による詳細な注解と英訳は進行中である。

Henrique LEITIAS, *The contents and context of Manuel Dias' Tianwenlie, and Rui MAGONE, The textual tradition of Manuel Dias' Tianwenlie* 天問略 (マテオ・リッチ Luis SARAIVA and Catherine JAMIED, *History of Mathematical Sciences: Portugal and East Asia III, The Jesuits, The Padroado and East Asian Science (1552-1773)*, World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd, Singapore, 2008 所収)を参照。

⁷ それぞれ前掲方豪『中西交通史』J・ニータム『中国の科学と文明』(思索社、1974年版)第四巻、第五巻、錢寶琮編、川原秀城訳『中国数学史』(みすず書房、1990年)、杜石然ほか編著、川原秀城ほか訳『中国科学技術史』下(東京大学出版会、1997年)、前掲藪内清ほか編『明清時代の科学技術史』所収の藪内清、橋本敬造、山田慶児ら一連の関連論考を参照。なお、李朝後期における『御製曆象考成後編』の受容とその影響について、SHI Yunli (石雲里), 'The Yuzhi Lixiang Kaosheng Houbian in Korea (前出 Luis SARAIVA and Catherine JAMI 編著所収、pp.205-229) を参照。

⁸ 前掲錢寶琮著書、276頁。

⁹ 「康熙の功過」、席沢宗主編『中国科学技術史・科学思想卷』(科学出版社、2001年)498-499頁、拙稿「東海西海・心同理同—紀念徐光啓暨「幾何原本」翻訳四百周年国際研討会速記」(『東方』総326号、2008年4月)号、同名の中国語拡大版は台湾清華大學歴史研究所「科学史通訊」第三十一

期、中華民國九十七年五月)を参照。

¹⁰ 前掲錢寶琮著書、240頁。なお、『崇禎曆書』の天文学、数学の底本について詳細な考証を行なった研究がある。前掲席沢宗主編『中国科学技術史・科学思想卷』470-472頁参照。それから、『崇禎曆書』の版本については、前掲徐宗沢著書241-256頁に詳しい。

¹¹ 『幾何原本』の東アジアにおける伝播と影響に関する本格的な研究はまだ殆どなされていないというのは、実状である。ただ、その中で、中国および朝鮮への影響は認められているが——例えば、本稿で言及された以外に、梅栄照ほか『欧幾里得「原本」伝入对我国明清数学的影響』(席沢宗ほか編『徐光啓研究論文集』(学林出版社、1986年)、後に『明清数学史論文集』(江蘇教育出版社、1991年)再録——だが、日本における影響については、たとえば「江戸期日本にも中国語訳を通じて「原論」すなわち「幾何原本」がもたらされたが、その根幹をなす幾何学的論証の重要性は、独自のパラダイムを持っていた和算の伝統下では結局理解されずに終わった」という見方は、どうも一般的のようである。近刊した日本語版「エウクレイテス全集」第一巻 原論I-VI(齊藤憲・三浦伸夫訳・解説、東京大学出版会、2008年)の三浦伸夫による訳者解説、同書四十六頁。しかし、まだ詳細な検証をしなければならないが、少なくとも幕末期活躍した洋学者佐久間象山(1811-1864)に幾何学の影響が見られると言えよう。たゞなほ、彼の『省魯録』にある有名な「詳証術は、万学のもとなり」「推算・重方、幾何・詳証の術、並へ究めてこれを悉す」などがそれを表わしているように思われる。

¹² Yihao Xu (徐義保) 'The first Chinese translation of the last nine books of Euclid's Elements and its source' (英文摘要版)、莫徳ほか編『欧幾里得幾何原本研究論文集』(内蒙古文化出版社、2006年) pp.263-270。但しこころでも、ルネサンス期の多くの訳者と同じく、Billingsleyも紀元前四世紀メガラのソクラテス哲学者の Euclid of Megara を紀元前三世紀アレクサンドリアの Euclid of Alexandria として誤認したのである。

¹³ 中国における『幾何原本』の版本は、本稿で言及した以外に、また蘭紀正・朱恩寛の現代中国語訳『欧幾里得幾何原本』(陝西科学技术出版社、1990年、2003年、底本はT.L. Heath, *The Thirteen books of Euclid's Elements: with introduction and Commentary*, Dover Publisher, Inc. N.Y. 1956)及び莫徳のモンゴロ語訳の五巻本(内蒙古出版社、1997年)などがある。詳しくは、上記蘭、恩訳書の「『欧幾里得幾何原本』的訳者「出版後記」」を参照。なお、『幾何原本』の中国受容史とその問題性について、東西の第一次史料に基づいて、先鋭な視点と緻密な論証をみせた好著は、安国風博士(P.M. Angelfriet, *Euclid in China, the Genesis of the*

First Translation of Euclid's Elements in 1607 & its Reception up to 1723, Leiden: Brill, 1998) がある。ちなみに、当著書の中国語訳版『欧幾里得在中国—漢訳「幾何原本」の源流と影響』は、二〇〇七年の十二月に、江蘇人民出版社から出版される予定だったが、事情により、今年の八月に延期されたという。拙稿「幾何原本」の成立及其在東亜の伝播—以概念的翻譯与公理思想为中心—(注9記『国際研討会論文集』上海古籍出版社近刊予定) などを参照。

¹⁴ 前出金泰俊『虚学から実学へ—十八世紀朝鮮知識人の北京旅行』自序。

¹⁵ 李家渙は臨終の際、「老夫(二八〇一年獄死、年六十)死なば、東国より幾何の種子絶えなん」(黄嗣永帛書)と吟じていたという。前掲山口正之『朝鮮キリスト教の文化史的研究』、612頁。

¹⁶ 『四庫提要』、863頁。

¹⁷ 前掲銭著『中国数学史』、245頁。

¹⁸ 例えば、朝鮮における漢文史料は、張伯偉編『朝鮮時代書目叢刊』(全九冊、北京・中華書局、二〇〇四年)、ベトナム(安南)における漢文史料の整理、研究は二十世紀の初期から今日に至って、中断があるものの続けられている。陳慶浩『越南漢喃籍之出版與目錄』(文科省科研費特定領域研究『東アジア出版文化研究 こはく』磯部彰編、知泉書館、二〇〇四年)所収)、Tran Nghia, Gros, François, *Catalogue des livres en Han-Nom*, Hanoi: Edition des sciences sociales, 1993 などがある。

¹⁹ 宋栄培「論」茶山哲学與利瑪竇《天主実義》之間哲学範式的類似性」、『東西交流史的新局 以基督宗教为中心』(古偉瀛編、台湾大学出版中心、2005年6月)所収、157-203頁参照。

²⁰ たとえば、『退溪集』(李滉)、『栗谷全書』(李珥)、『芝峯集』、『芝峯類說』(李睟光)、『星湖全集』(李滉)、『星湖全書』(李滉)、『順菴集』(安鼎福)、『湛軒書』(洪大容)、『燕巖集』(朴趾源)、『與猶堂全書』(丁若鏞)、『明南樓全集』(崔漢綺)などは代表的なものであると言えよう。

(本稿は平成17年度～同20年度科学研究費補助金基盤研究C(課題番号17520065) および国際学術振興基金平成十八年度(外国人研究者との共同研究)、十九年度(学術の活性化推進事業)からの助成による研究成果の途上報告の一部である。)